

国立国語研究所学術情報リポジトリ

『古今集遠鏡』における完了の助動詞による強意の用法の俚言訳方針

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2025-01-24 キーワード (Ja): 古今集遠鏡, 本居宣長, 助動詞, コーパス キーワード (En): Kokinshu-Towokagami, Motoori Norinaga, auxiliary verb, corpus 作成者: 久保, 桢子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0002000459

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



『古今集遠鏡』における完了の助動詞による強意の用法の俚言訳方針

久保柾子

総合研究大学院大学／国立国語研究所 博士課程

要旨

本稿は、本居宣長による『古今和歌集』の注釈書・『古今集遠鏡』において、完了の助動詞ツ・ヌに推量の助動詞ムが接続した、いわゆる「強意の用法」がどのように俚言訳されているか調査を行ったものである。本研究では、日本語歴史コーパス (CHJ) と『Himawari 版古今集遠鏡』を活用し、『古今集遠鏡』における強意の用法の訳出方法を収集、分析した。その結果、テムの訳し方とナムの訳し方には、「ウ・アラウ」などを用いるという共通点がある一方で、ナムのみ「テシマウ」を用いるという違いがみられた。また、このナムの訳し方は『古今集遠鏡』でのニキ・ニケリの訳し方と共に通るものであるという調査結果を得た*。

キーワード：古今集遠鏡、本居宣長、助動詞、コーパス

1. はじめに

『古今集遠鏡』(1793 年までに成立、1797 年刊) は、江戸時代の国学者・本居宣長による『古今和歌集』の注釈書である。本書において、宣長は、『古今和歌集』の真名序、長歌を除いた部分に宣長の生きた時代である近世後期の俚言訳¹を施しており、『古今和歌集』の口語訳に先鞭をつけたものであるとともに、江戸時代の口語資料として研究価値の高い資料とされていることは、豊富な先行研究により明らかにされている。

筆者はこれまで、推量の助動詞ムに完了の助動詞ツ・ヌが前接した、テム・ナムについて、国語学史上でどのような学説が展開されてきたかを調査してきた (久保 2024)。助動詞の用法記述において、これらの用法は「強意の用法」や「確述用法」と呼ばれ、各研究事典にも取り上げられているが、その用語や用法の詳細は統一されていない。事典類での記述は、次のようなものである (一重下線は原文、二重下線は筆者による)。

* 本稿は、JSPS 科研費 (23KJ1822)、および国立国語研究所の共同研究プロジェクト「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」(プロジェクトリーダー: 小木曽智信) による成果の一部である。また、本稿は、2023 年 12 月に「じんもんこん 2023」で行ったポスター発表、久保柾子・市村太郎・小木曽智信「『古今集遠鏡』コーパスの設計と構築」の一部に加筆修正を行ったものである。

¹ 『古今集遠鏡』の例言には「此書は、古今集の歌どもを、こと／＼いまの世の俗語（サトビゴト）に訳（ウツ）せる也」とあり、平安時代の和歌に用いられる「雅言（ミヤビゴト）」を、人々にとって身近な言葉である「俗語（サトビゴト）」によって逐語訳を試みるという方針が示されている。本稿ではこの訳を俚言訳とする。また、同じく例言に、「俗言は、かの國この里と、ことなることおほきが中には、みやびごとにちかきもあれども、かたよれるゐなかのことばは、あまねくよもにはわたしがたければ、かかることにとり用ひがたし、大かたは京わたりの詞して、うつすべきわざ也。」と記されていることから、俚言訳には主に近世の京都における口語が用いられていることが知られている。

文中のある構成要素（語句）を特別に強く表現したり、聞き手に強く伝達したりすることをいう。(略)c 助動詞による強調。完了の助動詞によって強調する。「その人や見にけむかし<その人はきっと見たであろう」（更級）現代語では「やってしまった」というように補助動詞「しまう」などの完了表現で強調する。（山口（編）（2001）『日本語文法大辞典』）

完了化辞「つ」「ぬ」が法助動詞とともに用いられて、動作・状態が確実に起こる（存在する・完了する）ことを強く推測する（意志する）表現を確述という。確述の表現は、ふつう「確かに（きっと・必ず）…に違いない（しよう）」と訳される。

（小田（2015）『古典文法総覧』）

このような強意の用法について、久保（2024）において本居宣長の学説を調査する際には、国語学資料として著名である『詞玉緒』（1779）を用いて調査を行っていたが、完了の助動詞に関しては次に引用するように、活用や係り結びに関する記述がみられるのみであった（以下、読みやすさを考慮し、『詞玉緒』『古今集遠鏡』はそれぞれ『本居宣長全集』第五巻（大野・大久保（編）1970）、第三巻（同1969）より引用し、本文には適宜「」を加えている）。

「ぬ」はいはゆる畢ぬ也。「な」「に」「ぬ」「ね」とはたらく辞なり。

（『詞玉緒』卷之六 第十九段）

「つ」は上件の「ぬ」と相ならびて同意にて。かれは「な」「に」「ぬ」「ね」とはたらき。これは「つ」「て」とはたらけり。（『詞玉緒』卷之六 第二十段）

件の「ん」と「め」との格どもは皆。「らん」「らめ」「けん」「けめ」「なん」「なめ」「てん」「てめ」などにもわたりて。みな同じことなり。（『詞玉緒』卷之六 第三十九段）

ここでは、ヌ・ツが同じ意味を持つ助動詞であることや、活用方法や係り結びに関する記述のみがみられ、宣長が推量の助動詞の単独用法と確述用法の差異をどのように認識していたのか判断できなかった。『古今集遠鏡』は、先述の通り『古今和歌集』の注釈書であり、その注釈内容は文法を主とするものではない。しかし、平安時代の助動詞と対応する俚言訳を調査することにより、宣長の助動詞の捉え方を探り、宣長の文法意識を考える足がかりにできるのではないかと考えた。また、現在『Himawari 版古今集遠鏡』が公開され、それを活用した研究も進められているほか（市村 2023a, 2023b）、形態論情報を付与した『古今集遠鏡』コーパスの構築も進行しており、コーパスを活用した『古今集遠鏡』研究、国語学史研究に取り組む意義があると考えた。

そこで本稿では、宣長が『古今集遠鏡』において、完了の助動詞ツ・ヌ、推量の助動詞ムの単独用法をどのように訳しているか、また、テム・ナムの形になった場合にはどのように訳しているか、それらの訳し方に差異はみられるか、コーパスを用いて調査し、その結果から、宣長による強意の用法の捉え方の考察を試みる。

2. 調査方法

本稿の調査では日本語歴史コーパス (CHJ), 『Himawari 版古今集遠鏡コーパス Ver.0.81』を用い, 以下の手順で行った。

- ① CHJ を用い, 『古今和歌集』の和歌の部分でツ・ヌ・ムが単独で用いられる用例, テム・ナムが用いられる用例をすべて抜き出す (具体的な検索条件式については, 本稿末尾の「使用データベース」の箇所に示す)。
- ② 『Himawari 版古今集遠鏡』で該当和歌を検索し, 対応する宣長訳を確認し, 訳出方法を考察する。

3. 先行研究

『古今集遠鏡』における宣長の俚言訳の特徴を調査する研究はこれまで多くあり, 特に助詞, 助動詞の訳出方法に関する論文には, 林・田代・渡辺・飯田 (1980), 高瀬 (1983, 1984, 1992) などが挙げられる。林・田代・渡辺・飯田 (1980) では, 個々の助動詞について詳細に訳の弁別を記しているが, 「所謂助動詞の重なり, 助動詞の複数の結合はとらぬ」とし, 強意の用法となる場合も含めて助動詞が複数続く形については調査対象とはしていない。高瀬 (1983, 1984) についても, ム, ベシ, ラムといった各推量の助動詞の訳し方を抽出しているが, 前接する助動詞と訳し方の違いの関係には触れられていない。また, 先述の通り, 近年構築されたコーパスの活用によって, より正確な用例集計と研究を試みることも本稿の重要な意義である。

4. 例言における俚言訳方針と実際の訳出状況

まず, 『古今集遠鏡』冒頭に示された, 本書の例言から, 宣長が設定した俚言訳の方針をみてみる。ム (ん) については,

○「ん」は, 俗言にはすべて皆「う」といふ, 「来ん」「ゆかん」を, 「こう」「いかう」といふ類也, 「けん」「なん」などの「ん」も同じ, へ花やちりけんは, 「花がちつたであらうか」, へ花やちりなんは, 「花がちるであらうか」と訳す,

とあり, ムをすべて「う」と訳すことに加え, ナムをムと同様に訳すことを示している。さらに, 現在の古典文法では主に「婉曲」と呼ばれている体言に接続する「む (ん)」について次のように述べている。

さて又語のつづきたるながらにある「ん」は, 多くはうつしがたし, たとへばへ見ん人は見よ, へちりなん後ぞ, ちるらん小野のなどのたぐひ, 人へつづき, 後へつづき, 小野へつづきて, 「ん」は皆ながらに有り, 此類は, 俗語にはただに, 「見る人は」, 「ちつて後に」, 「ちる小野の」とやうにいひて, 「見やう人は」, 「ちるであらう後に」, 「ちるであらう小野の」, などはいはざれば也, 然るに此類をも, しひて「ん」「なん」「らん」の意を, こまかに訳さむとなれば, 「散なん後ぞ」は, 「おつけちるであらうがその散た後にさ」と訳し, 「ちる

らん小野の」は、「さだめて此ごろは萩の花がちるであらうが其野の」、とやうに訳すべし、然れども、俗語にさはいはざれば、中々にうとし、

ここでもナムはムと同列の助動詞として並べられているが、「散なん後ぞ」については、細かく訳そうとするならば、「おつけちるであらうがその散た後にさ」と推量と完了の意味を両方含む訳を示しており、文末のナムと文中のナムでは、異なる訳となる方針を示している。

最後に、ツ・ヌの例言における記述は次の通りである。

ぬぬる、つつる、たりたる、きしなど、既に然るうへをいう辞は、俗言には皆おしなべてタといふ、なりぬなりぬるをば、ナツタ、来つ来つるをば、キタ、見たり見たるをば、見タ、有き有しをば、アツタといふが如し、タはタルのルをはぶける也、

ナムの俚言訳方針については、「ん」の項目でつぶさに示されているが、テムについては例言では訳出の基準が示されていない。『詞玉緒』にはヌとツを同意とする記述がみられ、例言でもヌとツを同じ項目に示していることから推察すると、テムもナムと同様の意味として扱うのではないかという予想が立つが、実際に抽出した調査結果から訳の方針を探ってみることとする。

「2. 調査方法」で示した手順のうち、①の調査によって得られた用例数は次の通りであった²。

表1 用例数

ツ（単独用法）	ヌ（単独用法）	ム（単独用法）	ナム	テム
40	109	203	28	11

これらの用例を、手順②として、『Himawari 版古今集遠鏡』を用いて検索し、該当する和歌の俚言訳を抽出した。その具体例の一部を次に示す。まず、ツ・ヌの訳出例である（和歌の後部に付した（ ）内は歌番号、古今集本文の該当箇所に下線、対応する宣長訳に二重下線を付した）。

・～タ

(1) 題しらず よみ人しらず

をりつれば袖こそにはへうめの花ありとやここにうぐひすのなく (32)

○梅の枝を折たによつてそれで袖がにはふのでこそあれ ここに梅の花はありもせぬのに此
袖のにはふのを梅の花がここにあると思ふかして鶯が来て鳴く

(2) 春のはじめのうた みぶのただみね

春きぬと人はいへどもうぐひすのなかぬかぎりはあらじとぞ思ふ (11)

○春がきたと人は云けれどもまだ鶯がなかぬ なんでも鶯のなかぬうちはいつまでもおれは

² 調査対象は和歌本文のみとし、仮名序で和歌が引用されている箇所、宣長が俚言訳をつけていない長歌については調査対象外とした。また、ヌの単独用法の用例のうち、35番歌「梅の花立ちよるばかりありしより人のとがむる香にぞしみぬる」について、『古今集遠鏡』では第五句が「しみける」となっており、対応する訳をヌの訳の例とは認め難いため、調査対象から除いた。

春ではあるまいとさ思う

・接続助詞テ～（～テオイタ，～テイク等）

(3) 寛平の御時きさいの宮の歌合のうた よみ人しらず

梅が香を袖にうつしてとどめてば春はすぐともかたみならまし (46)

○梅のにはひを袖へうつしてとめておいたならば春は過てしまうたと云てもそれが春の形見であらうに

(4) 歌奉れとおほせられし時によみて奉れる きのつらゆき

ゆくとしのをしくも有かなます鏡見る影さへにくれぬと思へば (342)

○年のつもるにしたがうて次第に鏡で見る影までがつむりが真つ白になつて 面はしづがよつて此やうにおいくれしていくと思へばさて / \暮てゆく年がまあをしう思はるる事かな

・願望（本文がテシガ・テシガナの形）

(5) みみなしの山のくちなしぇてしがな思ひのいろの下ぞめにせむ (1026)

○ああ耳無し山の支子がほしい物ぢや 恋の思ひの色の下染にせうにそれで下染をしたなら忍ぶ思ひを耳無しで人もえ聞くまいし 口なしで人に云れもすまいほどにそして思ひと云にひの字があるによつて 緋の色と云ぢや

・（助動詞部分の）訳出なし

(6) わたつみの我身こすなみ立かへりあまのすむてふうらみつるかな (816)

○さつぱり絶てしまうた中ぢやのに其人の心のかはつた事を又ひつかへして此やうに恨めしう思ふ事わいの 今さら恨んだとてなんのせんがあらうぞ さてもぐちなわしが心かな

(7) おく山のすがの根しのぎふる雪のけぬとかいはむ恋のしげきに (551)

○此やうに思ひがしげうてはどうもたまらぬにわしはもうきえる死ぬると云てやらうかい

接続助詞テ～の形のうち、ヌの訳には次のような「テシマウ」の訳出例を特徴的なものとして収集することができた。

(8) 来む世にもはやなりななむめのまへにつれなき人を昔と思はむ (520)

○いつそ早う来世になつてしまへばよいに そしたら此現在目のまへにつれない人を昔の事ぢやと 思モ わうに昔の事ぢやと思ふたらこれほどにつらうは思はれまいわさ

この訳し方は、強意の用法の訳し方として現代の古典文法教育などでもみられるものであるため、5節でより詳細に検討したい。続いて、ムの訳し方には下記のような例があげられる。

・～ウ、～アラウ

(9) 春のはじめによめる ふちはらのことなほ

春やとき花やおそきときわかむうぐひすだにもなかずも有かな (10)

○はや春になつた事なればもう花がさきさうな物ぢやにまださかぬは春の來たがほどより早いのか花のさくのがほどよりおそいのか鳶なりとも鳴いたらそれでどちらぢやと云ことがしれうにさてもまあ鳶さへなかぬ事かな

(10) 題しらず よみ人しらず

我屋どの池の藤なみ咲にけり山ほとときすいつかきなかむ (135)

○こちの庭の池の邊な藤の花が咲たわい 郭公はいつ来てなくであらう

(11) 桜の花のちり侍けるを見てよみける そせいほうし

花ちらす風のやどりはたれかしる我にをしへよゆきてうらみむ (76)

○さても / \ あつたら花を此やうにちらす風めが逗留して居る所はたれぞは知て居る者があらう 誰レが知て居るぞ おれに教へてくれい そこへ行てぞんぶんに恨みをいはう

(12) 題しらず よみ人しらず

こまなべていざ見にゆかむふるさとは雪とのみこそ花はちるらめ (111)

○だれかれさそひあはせて馬をのりならべて打つれてどれや見にゆかうぞ 此節ふる京サトはさぞや雪のふるやうにさひた / \ と花はちるであらうわい

以上のムの単独用法の主となる訳出方法は、例言に示された宣長の訳の方針と概ね合致しており、例言を基準として、適宜文脈に合わせて宣長が言葉を加えて訳している例である。各助動詞の単独用法の訳出方法と用例数を表2に示す。

表2 ツ・ヌ・ムの単独用法の訳出方法と用例数

ツ (40例)	～タ	17例
	訳出なし	11例
	接続助詞 テ～	8例
	願望 (本文がテシガ・テシガナの形)	4例
ヌ (109例)	～タ	69例
	訳出なし	19例
	テシマウ	11例
	接続助詞 テ～	10例
ム (203例)	～ウ	173例
	訳出なし (連体形ム)	19例
	訳出なし (連体形ム以外)	11例

続いて、強意の用法の形となる場合の俚言訳例をみてみる。テムの訳し方には次のようなものがあられた。

・～ウ, アラウ

(13) よみ人しらず

飛鳥川ふちは瀬になる世なりとも思ひそめてむ人はわすれじ (687)

○あすか川は淵瀬がようかはると云事で世間の人の心もそんな物ぢやと云事ぢやがたとひそのやうな世の中ぢやとてもわしは一トたび思ひそめてあらう人をばいつまでも忘れはすまい

- (14) かすが野のとぶ火の野守出て見よいまいくかありてわかなつみてむ (18)

○此春日野の飛火野の番人よ出てやうすを見てくれいそちは此野に住で居ればたいがい知れるであらうがまういくかばかりあつてから若菜をつみには來うぞ

- (15) 世の中のはかなきことをおもひけるをりにきくの花を見てよめる つらゆき

秋のきくにはほふかぎりはかざしてむ花よりさきとしらぬ我身を (276)

○菊の花をかう咲てあるうちは散るまではかざしてあそぼうぞあの花よりさきへ死なうもしれぬ我身ぢやものをあそばいでは

これらはムの訳し方と同じ方針である。例言のツ・ヌの項目で示されているような過去や完了の助動詞の訳し方はテムの例には反映されておらず、テムの形となる場合、ツは訳出しない方針をとっていることがわかる。続いて、ナムの訳し方をみてみる。

・～ウ、～アラウ

- (16) 水のほとりに梅の花のさけりけるをよめる 伊勢

春ごとに流るる川を花と見てをられぬ水に袖やぬれなむ (44)

○流れていく川へ花の影のうつつたのをあの水の中にも花があると見てはいつの春でもだまされて折られもせぬにをらうとしてはその水で袖がぬれるが今年も又ぬれるでかなあらう

- (17) うりんゐのみこのもとに花見にきた山のほとりにまかれりける時によめる そせい

いざけふは春の山べにまじりなむくれなばなげの花の陰かは (95)

○どれやけふは日のくれるまでも此春の山べをかけあるいてあそぼうぞ 日がくれたとても花の陰がなささうなかい いくらも花のかげがあればもし暮たならさいはひぢや 花のかげにとまらうわさて

「～ウ」「～アラウ」という訳し方はムの単独用法、テムの訳し方と一致しており、例言でのムとナムを同義の助動詞として示す方針とも合致している。ナムの宣長訳の中で特徴的な点として、ヌの宣長訳の特徴である「～テシマウ」と推量形を合わせた訳の形がいくつかみられるということがあった。

- (18) きのありとも

桜色にころもはふかく染てきむ花のちりなむ後の形見に (66)

○花はおつけ散てしまうであらうその後の形見にきる物を桜色にこう染て着やうぞ

- (19) あかでこそ思はむ中ははなれなめそをだに後のわすがたみに (717)

○思ふ中ならたがひにあきのこぬうちにさはなれてしまはう事ぢや どうしても久しうなればあきのくるならひなればせめて今此たがひにあかぬところをなりとも後々の思ひだしぐさにしてさはやあきがきてからはなれては何んにも思ひだしぐさもないわさて

このような、「～テシマウ」の訳出形は、テムの宣長訳にはあらわれないものである。強意の用法の俚言訳を分類すると表3のようになった。

表3 強意の用法の俚言訳例（和歌番号で示す。77番歌については、ナムが二箇所で用いられているため、第二句にあらわれるナムを77(1)、第五句にあらわれるナムを77(2)とした）

テム		ナム		
ウ・(デ) アラウ	訳なし	ウ・(デ) アラウ	テシマウ	訳なし
18, 20, 64, 276, 355, 443, 687, 736, 541	393, 951	43, 95, 77(2), 97, 138, 229, 283, 388, 733, 309, 532, 718, 875, 953, 971, 981, 1035, 1061, 1093	66, 67, 68, 77(1), 717, 719	371, 732, 799

5. 『古今集遠鏡』における「～テシマウ」

「～テシマウ」と訳する形は、「1.はじめに」で先述した通り、強意の用法の訳の例として、現代の古典文法教育などで頻繁にみられるものである。4節での調査結果により、テム(ツ)では用いられず、ナム(ヌ)にのみ用いられる「～テシマウ」について、追加調査として、『古今集遠鏡』では他にどのような用例がみられるか、『Himawari版古今集遠鏡』を用いて調査した。Himawariで検索する際の「本文種別」を「宣長訳」として検索したところ、次のような用例が収集できた。

- (20) ここちそこなひてわづらひける時に風にあたらじとておろしこめてのみ侍りけるあひだに
をれる桜のちりかたになれりけるを見てよめる 藤原よるかの朝臣
たれこめて春のゆくへもしらぬまにまちし桜もうつろひにけり (80)
○わしはあんばいがわるうて 帳ネドコロの帷カタビラをおろしてひとつもつてばかり居て
春もいくかやら日の過ていくもしらぬまに咲たら見やう / \ と思うてせつかく待つた桜も
はや此やうにうつろうてしまうたわいの

- (21) ならのみかどの御歌
ふるさととなりにしならのみやこにも色はかはらず花は咲けり (90)
○ふるい昔の都になつてしまうた此奈良の京にもやつぱり色は昔にかはらず都であつた時
のとほりに花はさいたわい

- (22) 題しらず よみ人しらず
かはづなく井手の山吹ちりにけり花の盛にあはまし物を (125)
○此井手の山吹がはやもう散てしまうたわい ああ残念なことをした まそつと早う花のさ
かりの時分に逢ふやうに来て見やうであつたもの

「～テシマウ」は、『古今集遠鏡』において、ニキ・ニケリを俚言に訳す際に頻繁に用いられ、

主に完了の助動詞と過去の助動詞が接続する際に用いられる宣長訳であり、ムの単独用法やテムを訳す際には用いられないものであった。

ここで『古今集遠鏡』の例言を振り返る。例言から読み取ることができる宣長の訳の方針は、

- ・ムとナムは同等の訳し方をする
- ・テムの訳し方には言及がない
- ・ツとヌは同等の訳し方をする

というものであった。実際の宣長訳をみてみると、ムとナムに同等の訳を加えるという点は例言と一致しているほか、テムもムと近い訳し方をとっていることがわかった。また、ツ・ヌは、同等の訳し方を施している箇所があるという点も例言の通りである。一方で、ヌには「テシマウ」の形も用いており、ナムについても、ムと同様の「～ウ」「～アラウ」に加えて、過去の助動詞を含むニキ・ニケリの俚言訳で多様される「～テシマウ」も併用していることがわかった。

6. おわりに

本稿では、『古今集遠鏡』において、助動詞ツ・ヌ・ムの単独用法と、テム・ナムの形であるいわゆる強意の用法において、俚言訳の違いがあるか調査した。それぞれの『古今集遠鏡』における用例を形式的に分類すると、ヌ・ナムはツ・テムと共に通する「～ウ・アラウ」のほかに「～テシマウ」という形を用いて訳す例があり、相違点を見出すことができた。また、この「～テシマウ」は、『古今集遠鏡』ではニキ・ニケリを俚言訳する際に多用するものであった。

これは、例言での宣長の俚言訳方針からは読み取れないものであるほか、ヌとツを同意とする『詞玉緒』の記述から予測していた、テムもナムと同様の意味として俚言訳を施すのではないかという推測とも異なる結果となった。

現代において、テム・ナムの訳し方は概ね共通するものとして学校教育の現場や『古今和歌集』をはじめとする古典の注釈書では捉えられている。しかし、本稿の調査結果では、宣長は少なくとも『古今集遠鏡』の中では、テム・ナムの訳し方に差異を設けており、その差異は例言で具体的に言及はされていないことから、無意識的なもの、もしくは言及するまでもないものであったのかもしれない。宣長をはじめ、当時宣長に影響を与えた学者のヌの捉え方について、一層の調査が必要であると考える。

今後の調査方針としては、『古今集遠鏡』において、他の助動詞とツ・ヌが接続する場合に訳出方法に差異がみられるかどうか調査をおこなうほか、今回の調査結果として得られた宣長の俚言訳の方針が後世の学者へ影響を与えているか、様々な資料から学説を探っていく。形態論情報を付した『古今集遠鏡』コーパスの構築により、今後さらに詳細かつ簡単に調査を行うことも可能となる見込みである。

参照文献

- 市村太郎 (2023a) 「『古今集遠鏡』に見られる程度副詞類とその周辺—洒落本での使用状況との比較—」岡部・橋本・小木曾 (編) (2023), 157–177.
- 市村太郎 (2023b) 「『古今集遠鏡』を対象とするコーパス構築の試み」岡部・橋本・小木曾 (編) (2023), 259–278.
- 大野晋・大久保正 (編) (1969) 『本居宣長全集 第三卷』東京: 筑摩書房。
- 大野晋・大久保正 (編) (1970) 『本居宣長全集 第五卷』東京: 筑摩書房。
- 岡部嘉幸・橋本行洋・小木曾智信 (編) (2023) 『コーパスによる日本語史研究 近世編』東京: ひつじ書房。
- 小田勝 (2015) 『実例詳解 古典文法総覧』大阪: 和泉書院。
- 久保栄子 (2024) 「助動詞の用法記述における「確述」「強意」の史的展開」日本近代語研究会 (編) 『論究 日本近代語 第3集』81–94. 東京: 勉誠社。
- 高瀬正一 (1983) 「『古今集遠鏡』に於ける推量の助動詞について 上」『国語国文学報』40: 1–15. 愛知教育大学国語国文学研究室。
- 高瀬正一 (1984) 「『古今集遠鏡』に於ける推量の助動詞について 下」『国語国文学報』41: 41–56. 愛知教育大学国語国文学研究室。
- 高瀬正一 (1992) 「『古今集遠鏡』における「已然形十ば」の訳出について」『国語国文学報』50: 183–194. 愛知教育大学国語国文学研究室。
- 林巨樹・田代美樹・渡辺千賀子・飯田晴巳 (1980) 「江戸中期の国語について—古今集遠鏡訳文の助動詞研究」『青山語文』10: 142–172. 青山学院大学。
- 山口明穂 (編) (2001) 『日本語文法大辞典』東京: 明治書院。

関連 Web サイト

- 市村太郎編 (2021) 『Himawari 版古今集遠鏡コーパス Ver.0.81』
[\(2024年6月8日確認\)](https://sites.google.com/view/ichimurat/%E5%B8%82%E6%9D%91%E7%A0%94%E7%A9%B6%E5%AE%A4)
- 国立国語研究所 (2024) 『日本語歴史コーパス』(バージョン 2024.3, 中納言バージョン 2.7.2)
[\(2024年6月8日確認\)](https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/)

【使用データベース検索条件式】

ツ

キー:(語彙素 =" つ " AND 品詞 LIKE " 助動詞 %") IN subcorpusName=" 平安 - 仮名文学 " AND 作品名 = " 古今和歌集 " AND 本文種別 = " 歌 " WITH OPTIONS tglKugiri="|" AND tglBunKugiri="#" AND limitToMainText="1" AND limitToSelfSentence="1" AND tglWords="20" AND unit="1" AND encoding="UTF-16LE" AND endOfLine="CRLF"

ヌ

キー:(語彙素 =" ぬ " AND 品詞 LIKE " 助動詞 %") IN subcorpusName=" 平安 - 仮名文学 " AND 作品名 = " 古今和歌集 " AND 本文種別 = " 歌 " WITH OPTIONS tglKugiri="|" AND tglBunKugiri="#" AND limitToMainText="1" AND limitToSelfSentence="1" AND tglWords="20" AND unit="1" AND encoding="UTF-16LE" AND endOfLine="CRLF"

ム

キー:(語彙素 =" む " AND 品詞 LIKE " 助動詞 %")AND 前方共起: 品詞 LIKE " 動詞 %" ON 1 WORDS FROM キー IN subcorpusName=" 平安 - 仮名文学 " AND 作品名 = " 古今和歌集 " AND 本文種別 = " 歌 " WITH OPTIONS tglKugiri="|" AND tglBunKugiri="#" AND limitToMainText="1" AND limitToSelfSentence="1" AND tglWords="20" AND unit="1" AND encoding="UTF-16LE" AND endOfLine="CRLF"

ナム

キー:(語彙素 =" む " AND 品詞 LIKE " 助動詞 %")AND 前方共起: (語彙素 =" ぬ " AND 品詞 LIKE " 助動詞 %") ON 1 WORDS FROM キー IN subcorpusName=" 和歌集 " AND 作品名 = " 古今和歌集 " AND 本文種別 = " 歌 " WITH OPTIONS tglKugiri="|" AND tglBunKugiri="#" AND limitToMainText="1" AND limitToSelfSentence="1" AND tglWords="20" AND unit="1" AND encoding="UTF-16LE" AND endOfLine="CRLF"

テム

キー:(語彙素="む" AND 品詞 LIKE "助動詞%")AND 前方共起:(語彙素="づ" AND 品詞 LIKE "助動詞%")ON 1 WORDS FROM キー IN subcorpusName="和歌集" AND 作品名="古今和歌集" AND 本文種別="歌" WITH OPTIONS tglKugiri="#" AND tglBunKugiri="#" AND limitToMainText="1" AND limitToSelfSentence="1" AND tglWords="20" AND unit="1" AND encoding="UTF-16LE" AND endOfLine="CRLF"

Translation Policy for Use of Strong Meaning with Auxiliary Verb of Completion in the Kokinshu–Towokagami

KUBO Masako

Graduate Student, Graduate University for Advanced Studies, SOKENDAI / NINJAL

Abstract

This paper investigates the manner by which “strong-meaning usage,” in which the auxiliary verb “*mu*” is connected to the auxiliary verb “*tsu*” or “*nu*” for completion, is translated into slang in the “Kokinshu–Towokagami,” which is a commentary on the “Kokin–Wakashu” by Motoori Norinaga. The study utilizes the Corpus of Historical Japanese and the “Himawari version of the Kokinshu–Towokagami” to obtain and analyze the translation methods of strong-meaning usage in the Kokinshu–Towokagami. The result shows that the translations of “*temu*” and “*namu*” use common words “~*u*”, “~*arou*”, whereas only “*namu*” differs in the use of “~*teshimau*.” Additionally, “*namu*” is translated in both the translations of “*niki*” and “*nikeri*” in the Kokinshu–Towokagami.

Keywords: Kokinshu–Towokagami, Motoori Norinaga, auxiliary verb, corpus